まるごと吉野川
“魅力再発見”講座

**古くから吉野川との関わりによって育まれてきた阿波の文化・歴史・環境をテーマに
さまざまな角度から吉野川について学んでもらおうという「まるごと吉野川“魅力再発見”講座」。
コロナ禍のなかでしたが、今年度も3つの講座を開催しました。**

2021
1/17

吉野川と水運

講演会

～川を通じて阿波の歴史を学ぶ～

今年度の「まる吉」講演会は、**徳島市立徳島城博物館館長の根津寿夫さん**を講師に迎え、博物館所蔵の貴重な絵図や資料などを見ながら、吉野川の水運をテーマにお話しいただきました。

※　※　※

徳島は古くから吉野川を中心とした水運によって栄えてきました。自動車や鉄道のない時代、舟は唯一の大量運搬の手段。江戸時代には艜舟（ひらたぶね）（平田舟）という帆掛け船が上流域の藍や煙草、木炭などを下流に搬送し、帰り荷として米、塩、雑貨などを川湊に搬送していました。艜舟は舟底が平たく喫水が浅いため、急流や浅瀬でも航行しやすいのが特徴で、最盛期には大小千艘もが吉野川を航行していたとか。吉野川を利用した物流は、大正3年（1914）、徳島～池田間に鉄道が開通するまで続きました。

江戸時代後期、藩が自領を知るために作成した「阿波国大絵図」には吉野川の流れがくっきりと。村の名前や番所、蜂須賀家の別邸、藩主が巡見に訪れた場所などが詳細に記されています

徳島市立徳島城博物館
館長　根津寿夫さん

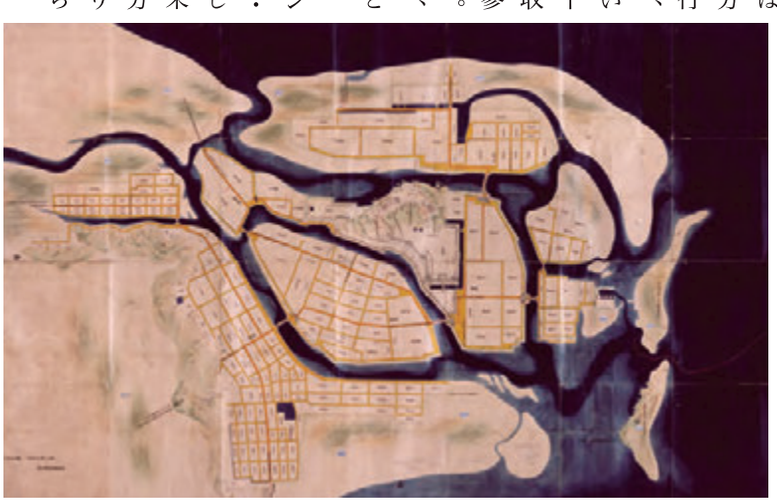
一方、人の行き来は道路が主役。吉野川に沿って東西に走る撫養街道、伊予街道が幹線道路で、川の往来には「渡し」が使われました。江戸時代の「吉野川分間（ぶけん）絵図」には、「渡場（わたしば）」や「渉場（わたりば）」が詳細に記されています。渡場は渡し船が行き来していたところ、渉場は浅瀬を歩いて渡っていたところではないかと、根津さんは考えています。このように吉野川に沿って発達した縦横の交通網によって人や物が行き交い、流域には池田、脇町、岩津、川島など多くの川湊が栄えました。川湊は物資の集積地であり、地域経済の中心をなす「郷町（ごうまち）」に発展したものも。

感染対策をとりながら開催しました

桃山～江戸時代の城下町の多くは河口部に立地し、水上交通で栄え、後に水の都と呼ばれる都市になっています。徳島（現在の徳島市）もそのひとつで、新町川・助任川など大小の河川を水上の幹線道路として活用し、阿波藍などの特産品を出荷し、繁栄を極めました。

ここで根津さんが「阿波国徳島城之図」を紹介してくれました。これは正保3年（1646）に幕府に提出された図の控えで、城郭内の建造物、石垣の高さ、堀の幅などの軍事情報はもちろん、城下の町、山川の位置などが詳細に記されています。特筆すべきは川。水深を色の濃淡で描き分けていて、干潮時に船の航行が困難になる箇所が分かり、川がどれだけ重要視されていたかがうかがわれます。城下には藩主の乗る御座船を収めた水軍基地が築かれ、参勤交代の際の移動も船――。江戸時代の城下町・徳島は、今からは想像できないほどの水上都市だったのです。

初の試みとしてオンラインによる配信も行い、現地・Web合わせて125名が参加した講演会。吉野川によって栄えた阿波の歴史を繙く90分はあっという間でもっと知りたい！と意欲を駆り立てられました。



阿波国徳島城之図（あわのくにとくしまじょうのず）
徳島城を中心に武家地、足軽町、町人地、寺町などが整然と配置されています。お堀や川の色に注目！ こちらの絵図は、国立公文書館所蔵の幕府に提出した原図。国指定重要文化財

昭和初期の新町川のようす。上荷船が行き来し、藍蔵が立ち並ぶ河岸には荷揚げ場「雁木（がんぎ）」も見えます
（「写真でみる徳島市百年」より　提供／徳島市史編さん室）